教育情報学研究　第3号（2005）
Educational Informatics Research, 2005, No. 3, 113-124

ヴァージニア大学における入学者選抜と広報活動

倉元　直樹

東北大学高等教育開発推進センター/東北大学教育情報学教育部・助教授

要旨：様々な機会に北米の大学入学者選抜の実情に関する訪問調査を行ってきた。今回、UVAの訪問では、アドミッション・オフィスの実際の諸活動の視察を目的とした。その結果、選抜委員会、大学説明会、キャンパス・ツアーに参加することとなった。

競争選抜的な米国の大学の典型であるが、新入生の入学者選抜は早期専願選抜と一般選抜の2種類で、書類選考となっている。大半は機械的に合否が決まる。今回、観察が許された選抜委員会は、特殊なケース、すなわち、合格基準に達しないが、即不合格とできない者が対象であった。うち、2例について、まとめた。大学説明会には30名ほどの参加者があった。そのほとんどが父兄同伴であった。キャンパス・ツアーは約1時間掛けて徒歩でキャンパス中心部の主だった場所を見学して回るという企画であった。

選抜委員会は主観的な議論が印象的であった。広報活動はわが国の大学の方が進んでいる部分もあるとの印象を受けた。

キーワード：大学入学者選抜、北米、選抜委員会、大学説明会、キャンパス・ツアー

はじめに

平成11 (1999) 年、国立大学に初めてのアドミッションセンターが設立されてから約6年が経過した。この間、「アドミッションセンター[1]」を持つ国立大学の数は拡大の一途をたどり、平成16 (2004) 年6月の時点で13大学となっている (国立大学アドミッションセンター連絡協議会、2004)。

アドミッションセンターは基本的にAO入試の実施を担当する機関とみなされている。しかし、それと同時に、国立大学のアドミッションセンターでは、大学入試に関する専門的な研究機関としての入試研究の活動も盛んに行ってきた。中でも、とりわけ重点を置いてきた研究テーマのひとつに、海外の大学入学者選抜の実情調査がある。手探り状態で開始したAO入試について、その改善に資する情報を得るため、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、オランダ、オーストリア、イタリアといった国々の大学、および、大学入学者選抜に関係する諸機関を訪れてきた。

今回、米国のふたつの大学で訪問調査を行う機会を得た。ひとつはヴァージニア大学 (以下、UVAと略記する)、もうひとつはノースイースタン・イリノイ大学である[2]。国立大学のアドミッションセンターにおける共同研究で調査に訪れたニューヨーク州立大学バッファロー校も含め、個人的には、これまでにも米国の大学に訪れる機会は何度かあった。そこで、今回は、これまでとは違った新たな視点で米国の大学の訪問調査を行うことを企図した。

今回の訪問対象は、両者とも州立大学であるが、その位置づけには大きな違いがある。それに応じて、それぞれ全く違った観点から調査目的を立て、訪問するセクションを選定することとした。

そのうち、本稿ではUVAのアドミッション・オフィスで行った訪問調査に関する報告を行う。

1．調査の目的

今まで様々な機会を得て北米の大学入学者選抜の実情に関する訪問調査を行ってきたが、従来の調査方法は、主として面接方式による聞き取り調査にとどまっていた。そこで、今回のUVAの訪問では、アドミッション・オフィスの実際の諸活動に参与観察することも目的のひとつとして設定し、受け入れ先のアドミッション・オフィスに協力を依頼した。その結果、(1) 選抜委員会 (Committee Meeting)、

(2) 大学説明会 (Information Session)、(3) キャンパス・ツアー (Campus Tour) に参加することを認められた。

2．2. ヴァージニア大学 (UVA: University of Virginia)

2.1 大学の沿革

UVAは東部から南部の入り口に位置するヴァージニア州の州立大学 (land-grant university) である。ヴァージニア大学の位置するシャルロッテビル市は約11万人の人口の小ぎれいな小規模都市である。治安も極めて良く、首都ワシントンD.C. に比較的近いこともあって利便性も高い。「全米で最も住みたい街」だそうである。

ヴァージニア大学の創設者は、独立宣言の起草に加わったアメリカ合衆国第3代大統領トーマス・ジェファーソンである。1817年に、現在大学の中庭 (The Lawn) となっている場所で定礎式が行われた。最初の学生が入学したのはジェファーソンが没する1年前、1825年のことであったという。

卒業生にも錚々たる面々が名を連ねている。暗殺された第35代大統領ジョン・F・ケネディの弟で、自身も大統領候補であったときに暗殺されたロバート・ケネディなどの政治家、財界の重鎮、スポーツ選手など、様々な分野で卒業生が活躍している (以上、University of Virginia, 2002)。

2.2 大学の特徴

学部は文理学部 (College of Arts & Sciences)、建築学部 (School of Architecture)、商学部 (McIntire School of Commerce)、教育学部 (Curry School of Education)、工学・応用科学部 (School of Engineering and Applied Science)、看護学部 (School of Nursing) の6学部で、専攻は65種類である。複数課程の専攻、独立専攻、学部レベルでの研究、インターンシップ、留学の制度もある。

学生数は学部生が約12,600名、大学院で6,250名と、米国の大学としては大きな方ではない。学生の出身地は全米50州全てにまたがっており、留学生も90ヶ国から受け入れているが、全体の67%は州内の出身である。人種的には、学部レベルでは11%がアジア系米国人、9%が黒人、3%がヒスパニック系米国人である。学生 / 教員比は15.6対1となっている。

卒業率は高い。新入生の96%が2年生に進級し、92%が卒業を果たす[III]。

学生用の寄宿舎も充実している。学部生の約半数が寮 (Grounds) で生活しているそうである。新入生のほとんどが暮らす寮があり、カレッジ (College) と呼ばれる寮[IV]も一般のものがふたつ、留学生用がひとつある。また、入寮者に中級レベルの語学力を要求する語学 (フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、日本語、ヒンドゥー・ウルドゥー語、アラビア語、ペルシャ語、ヘブライ語) 研修用の寮もある。

学費は授業料、登録料 (Tuition and Fees) を合わせてヴァージニア州内出身の新入生が年間$4,780 ($1.00 = 110円で換算して約52万6千円)、ヴァージニア州外出身の新入生が $19,990 (約219万9千円) となっている (以上、University of Virginia, 2002)。なお、州内と州外で授業料に格差を設けるのは、米国の州立大学としてごく普通のことである。むしろ、州税で大学運営の一部をまかなっている以上、格差をつけなければ説明責任 (accountability) を果たせないということになるのであろう。

2.3 評価

2005年版 US News & World Report 誌のランキングによると、UVAはカーネギー・メロン大学 (Carnegie Mellon University) 等と並んで、総合指標において全米の総合大学22位にランクされている。公立大学としては、21位のUCバークレイ (University of California-Berkley) に次いで2番目に高い評価である。

さらに、奨学金等の充実によって「良い教育を安い費用で受けられる大学」のランキングでは21位、専門分野で言えば、商学部が全米で9位、工学部が33位にランクされている (US News & World Report, 2004)。

UVAは、米国の公立大学として、紛れもなくトップクラスに位置づけられる大学のひとつである。

3．ヴァージニア大学の入学者選抜

3.1 アドミッション・オフィス (Office of Admissions)

UVAのアドミッション・オフィスは、キャンパスの中心部に位置するマコーミック通り地区

(McCormick Road Area) の中の ピーボディ・ホール (Peabody Hall) という小さいながらも瀟洒な独立した建物の中にある。

スタッフは管理職 (dean) が12名、書類選考のためのスタッフが10名、職員が18名ということである。パーク・ムス氏によれば、この規模の大学としてはさほど大きくない陣容だそうである。

3.2　入学者選抜

競争選抜的な米国の大学で一般的なパターンとして、新入生の入学者選抜は、ヴァージニア大学においても早期専願選抜 (Early Decision) と一般選抜 (Regular Decision) の2種類となっている。これも米国の大学の通例であるが、書類選考によって入学者選抜が行われる。入学には新入学と編入学とがあるが、ここでは新入学について紹介する。以下、本項の記述は主として University of Virginia (2002) による。

選抜資料、および、評価観点は以下の通りである。

3.2.1.　高校成績

職業体験等の科目を除き、学業と関連しているアカデミックな科目 (rigorous program) が選抜のための評価の対象となる。英語4単位、大学進学者のための数学4単位、外国語2単位、社会科1単位、理科2単位（生物、化学、物理の中から選択、工学部志望者は化学、物理を含む3科目）が志願のための最低履修要件である。ほとんどの合格者は、それを凌駕した成績を上げているということである。大学では、志願者に対して自分の学校で開講されている中で最も難しいアカデミックな科目 (most rigorous academic program) を選択するように薦めている。また、さらに可能であれば、アドバンスト・プレースメント (AP: Advanced Placement)、インターナショナル・バカロレア (IB: International Baccalaureate)、特別コース (honor courses) を含む最低5単位以上のアカデミックな科目を、毎年取ってくるように薦めている。

3.2.2.　標準テストの成績

SAT Ⅰ、または、ACTの成績に加え、SAT Ⅱの科目テスト3科目が要求されている。SAT Ⅱは、「作文」と「数学」が必答科目であり、その他にさらに1科目を選択しなければならない[V]。SAT Ⅰは下位テスト（言語: Critical Reading、数学: Math）ごとに最高得点、ACTは総合評価 (Composite Score) の最高点が選抜に用いられる。4年生（終了学年）の1月までの成績を受け付けるが、早期専願の志願者は11月、一般選抜の志願者は12月までに全てのテストの受験を完了することが薦められている。得点は、テスト会社から大学に直接送られるようにする。ヴァージニア大学のコード番号はSATでは5820、ACTでは4412である。

母語が英語以外の者で米国内に2年以上居住した者に対しては、英語習熟度テスト (ELPT: English Language Proficiency Test)、米国居住歴2年以内か海外に居住する者に対しては、TOEFL (Test of English as a Foreign Language) の受験が薦められている。

3.2.3.　進路指導担当者 (guidance counselor) からの推薦状

教員 (teacher) からも推薦状をもらうことを薦めているが、出願の要件とはなっていない。大学側としては推薦状も以下の出願書類に同封して欲しい、としている。

3.2.4.　出願書類

編入学も含め、全ての入試区分に共通の出願票が用意されている。その中で、新入学志願者が記入するのはほぼ全てである。具体的には、以下の通りである。

Part 1: 基本志願票
Part 2: 新入生のための追加票
Part 3: 調査書、成績表
Part 4: 年度中間成績表

以上のほか、ヴァージニア州内居住者に対しては、

Part 1b: ヴァージニア州内優遇志願票

も用意されている。

3.2.5.　面接

入学者選抜委員会としては、面接は要求しないし、面接結果[VI]を評価に加えることもしない。

3.2.6.　経済的状況

経済的状況は考慮されない[VII]。

3.2.7.　ハンディキャップ

後述の「入学者選抜用志願者シート」にも見られる通り、学習障害 (LD: Learning Disability)」に対する保護が手厚い。毎年、LDと診断された志願者が200名ほどUVAを受験するそうである。LDと診断されている場合、外国語等、LDの志願者にとっ

て本質的に学ぶのが難しい科目については、ハンディキャップと考えて大目に見るそうである。ただし、その中で実際に入学してくる者は毎年20名程度に留まる。そういったケースについては、個別にチューターを付けるなど、手厚くサポートすることとなる。

その一方で、視覚障害者、聴覚障害者や車椅子の学生等、身体的なハンディキャップを負った学生は少ないそうである。それは、キャンパス内で授業を受ける際に建物間の移動が多いこと、起伏が激しいことなど、主にキャンパスの環境が障害に不適であることに由来する、との説明であった。

3.2.8. 早期専願選抜

早期専願選抜においては、合格すると必ず入学しなければならない、という縛りがある。出願締め切りは11月1日である。志願者には、12月1日頃に合否判定結果が伝えられる。判定結果は、合格 (admitted)、保留 (deferred)、不合格 (denied) の3種類である。保留と判定された場合、一般選抜に回ることになり、専願の縛りが解かれる。

SATⅠの受験は11月1日以前に終えておくことが薦められるが、SATⅡに関しては受付締切日までに全ての受験を終える必要はない、とされている。

3.2.9. 一般選抜

一般選抜 (regular admission) の受付締切日は1月2日である。出願はオンラインで行うことが薦められており、オンラインで出願した場合には重複して郵便で送らないようにとの注意が成されている。1月10日が調査書、1月15日が年度中間成績表の締切日となっている。

入学許可の決定は、3月一杯までに行われる。NACAC (National Association of College Admissions Council) の協定によって5月1日が入学手続きの〆切日とされている[11]ので、入学意思の決定のために1ヶ月ほどの期間を見て、4月1日前後に合否判定結果が伝えられる。入学を許可された者は5月1日までに入学手続きを行わなければならない。入学料 $250.00 が課せられるが、5月1日以降はいかなる理由があっても返却されない。

4. 選抜委員会 (Committee Meeting)

今回の訪問で参与観察が許された選抜委員会は、特殊なケースに対してのものである。すなわち、あらかじめ決められている合格の基準には達しないものの、諸事情を鑑みた場合に機械的に不合格とはできない志願者に対する合否判定を行うためのものである。

通常の合否判定プロセスでは、複数の評価者が出願書類に目を通して判定を行うが、著しく意見が食い違う場合がある。その場合、委員会を開き、全員で討議を行って、最終的には多数決で合否を決める。UVAでは、毎年、一般選抜で毎年約15,000人が志願してくる。そのうち約5,000名程度が合格で、実際に入学するのは3,000名程度だそうである。その中で、この選抜委員会に掛かる志願者は約40〜50名ということである。

4.1 入学者選抜用志願者シート

志願者の情報は、レターサイズ1枚のシートの裏表に要約される。そこに記入された情報に基づいて合否が判断されるのである。ここでは、仮に「入学者選抜用志願者シート」と呼ぶこととする。本稿末にシートのサンプルを掲載する。

以下、シートの使い方、および、略号について簡単に説明する。

まず、左上の余白に志願者の名前、住所、出身校高等の情報を書き込む。次に、右上の余白に志望するコース、居住地域 (V: Virginia / N: non Virginia)、性別 (M: male / F: female) を記号で書き込む。

右上のコードは左から、OBの子弟 (LEG: Legacy)、教員の子弟 (FAC: Faculty)、兄弟の在学経験 (SIB: Siblings)、学習障害 (LD)、などとなっており、それぞれの項目に該当していれば、それを○で囲む。LEG該当者 (OBの子弟) に対しては、学費の面での優遇はなされないが、合否判定では州外の居住者であっても州内居住者と同じ規準で扱われる。

その下は左から順にSATⅠの受験日 (SATⅠ Date)、言語テスト成績 (V)、数学テスト成績 (M)、SATⅡの受験日 (SATⅡ Date)、作文テストの成績 (WR)、数学テストの成績 (M)、その他の科目の成績 (Other)、ACTの受験日 (ACT Date)、総合評価 (Comp)、等となっている。

さらにその下は学校の成績の記入欄である。まず、左段の上から評定平均値 (GPA)、席次 (RIC: 何名中何位、という表示の仕方)、その下は相対評価で10段階、あるいは、5段階の何番目か、という情報である。出身学校によって、成績通知のスタイルが

異なるので、それに合わせたフォーマットになっているものと思われる。

左の囲み部分は特筆すべき事項に対するチェックである。意味が十分に把握し切れない項目もあるが、上から順に、受講した授業の難しさ (CURRICULUM)、成績 (GRADES / RIC)、標準テストの得点 (TEST SCORES)、学業の努力 (ACAD INDUSTRY)、成績向上傾向 (ACAD IMPROVEMENT)、学習意欲 (LOVE OF LEARNING)、推薦状 (RECOMMENDATIONS)、受賞歴 (HONORS / AWARDS)、課外活動 (EXTRACURRICULARS)、リーダーシップ (LEADERSHIP)、性格 (?) (BB / CHARACTER)、才能 (SPECIAL TALENT)、作文の構成 (WRITING: FORM)、作文の内容 (WRITING: CONTENT)、多様性 (DIVERSITY)、経済的困窮 (ECON HARDSHIP)、その他の不運 (OTHER ADVERSITY)、片親 (SINGLE PARENT)、直系家族に大学卒がいない (FIRST GEN COLL) となっている。

その右は4年生時、すなわち、新入生の場合は大学志願時に受講している科目である。最も高いレベルの授業には、「*」、そうではない場合には「✓」を書き込むことになっている。

さらにその右は、AP、または、IBの科目 (Subject) と成績 (Score) である。右端はTOEFLの情報である。

評価結果は下の囲み欄に記載される。早期専願選抜では2名、一般選抜では最大4名が判定を行うようである。判定は「合格 (Offer)」、「優先順位の高い保留 (HL)」、「保留 (L)」、「不合格 (Deny)」の4段階である。

中段に専攻志望欄 (POSSIBLE MAJOR) があるので、それによって選抜の基準も異なってくる。入学後に専攻を変えるのは比較的容易であるが、人気のない専攻から人気のある専攻に移っていくのは難しいそうである。

裏面は、不足している資料に関する請求の記録、備考欄となっている。

このシートは合否判定の期間に何度もチェックされ、最後に全体をまとめてから合否の通知作業にかかると言うことであった。

なお、今回参加を許された選抜委員会でもこのシートが用いられた。委員会への参加者全員に、委員会に掛けられる全ての志願者に関するシートのコピーが事前に配布される。委員は開会前に全員分のシートを読み、それを前提にして議論が展開されることになっているそうである。

4.2　選抜委員会の実際

この日の9時からの選抜委員会に先立ち、30分ほど委員会を統括するマリアンヌ・コジーウィクス女史 (Ms. Marianne Kosiewicz) に説明を受けた。説明は、主に、シートの読み方についてであった。筆者にも、委員会が終わった時点で返却することを条件に、シートのコピーが渡された。

この日は、筆者以外にもワシントンD.C.の高校の先生といった立場のゲストが見学に訪れていた。選抜委員会に見学者を受け入れるようなことは、さほど珍しいことでもない模様である。

スケジュールの関係で、筆者が参加できたのは委員会の開始時点から1時間ほどの間であった。筆者が退出した後も、委員会は続けられた。

筆者のいる間、志願者の個人情報の書き込まれた選抜用のシートを参照しながら、4～5名のケースについて議論が行われたが、そのうち、ここでは議論の内容がおおよそ聞き取ることができ、さらに筆者の印象に残った2人のケースに関わる報告を行うこととする。

なお、選抜委員会の見学の際にはメモを取らなかった。したがって、以下の記述は不確かな記憶に基づくものである。したがって、その内容は極めてあやふやなものであるが、委員会における議論の対象となった志願者のプライバシーの問題もあるので、正確な内容を詳らかにするわけには行かない。したがって、以下の記述は一種の例示だと考えていただきた

い。

4.2.1. ケース1：幼いときに父親を殺害された志願者

1番目のケースは、アジア系のマイノリティで男子の志願者である。親の代で米国に移民をしてきた。工学系の専攻を志望している。

幼いときに父親を殺害されたために、母親とともに米国に渡ってきた、という事情がある。

学校の成績は悪く、3科目の受験が出願要件となっているSATⅡについても、1科目も受験していない。したがって、形式的に合否基準を適用すれば、合格の範疇には全く入らない。ここでは、生育歴を考慮されることとなった。

会議は、最初に実際に提出された選抜資料に目を通して合否判定をした担当者が、当該志願者の事情について概略を説明し、それに対して全員で意見を述べる、というスタイルで進められた。

この志願者のケースについては、主に、幼いときに父親を殺された経験が生育歴にどれほど大きな影響があったか、ということを巡って議論が行われた。さらに、極貧生活の中で育てられたということにも考慮すべきであるという意見も出された。

熱心な議論の中で、あるひとりの委員から、

「アドミッション・オフィサーとしてこれまで扱ってきた志願者の中にもこういったケースはあったが、学力を度外視しすぎるのも問題である」

という主旨の意見が出され、「保留 (L)」が主張された。それに対して、

「『保留』だとほとんど合格のチャンスはないので、それではまずいのではないか」

といった反対意見が出された。さらに、それに対して、

「昨年は、『保留』からも合格者を輩出しているので、問題はないのではないか」

といった意見も出され、議論は白熱した。

その後も活発な意見交換が繰り広げられたが、ほぼ意見が出尽くしたところで司会のコジーウィクス女史が挙手による投票を促した。出席者は15名ほどであったが、投票権を持つメンバーは10名のようで、残りは投票権を持たないオブザーバーという扱いである。

投票結果は、「合格 (offer)」が0名、「優先順位の高い保留 (HL)」が8名、「保留 (L)」が2名、「不合格 (Deny)」が0名ということで、結論は「優先順位の高い保留 (HL)」となった。

4.2.2. ケース2：ボランティア活動に熱心に取り組んできた志願者

第2のケースは、州外居住の卒業生の子弟で女子の志願者である。志望の専攻は文科系である。

まず、SATⅡの受験科目数が出願基準に満たない。また、成績自体は良いが、履修してきた科目も十分な水準のものではない。

ところが、推薦状に彼女のボランティア活動のことが詳しく記されていた。今まで、禁煙運動キャンペーンに1日平均7時間を費やしてきたということである。また、その活動に対する高いレベルの表彰歴もある。

彼女を推す委員から、

「もし、ある運動分野のトップクラスの選手がUVAを受けてきたとして、その競技成績が全米No.1でないからといって、その志願者を不合格にすることができるのか？」

といった議論が出された。それに対して、反対意見を持つ委員から、

「この志願者のケースは、そういった類の問題ではない。学業を放り出してまで、社会活動に専念するようなことは、大学に入学した後の学習活動を考えると、それ自体がまず問題であろう。」

という意見が出された。また、別の委員からは、違った観点での議論が提起された。

「推薦状に書かれていた『1日平均7時間のボランティア活動』と言うのは常識的には考えられない長さである。そもそも、その推薦状の評価にかなりの水増しが入っていて、それ自体が信用できないのではないだろうか。」

その後、議論が収束しかけたところで、その流れに同意できない委員から、

「自分は高校に勤めていて、長年、推薦状を書いてきたが、『25年間の教職生活で初めて出会った素晴らしい生徒だ』というほどの手放しの表現でほめたたえることは、よほどのことだと思う。したがって、それが嘘だということはあり得ない。」といった意見が出された。

結局、時間の問題もあって、議論が打ち切られて投票に移ったが、「合格 (offer)」が2名、「優先順位の高い保留 (HL)」が2名、「保留 (L)」が4名、

「不合格 (Deny)」が2名、と委員の間の評価が大いに割れる結果となった。

以上のような形式で、一人ひとりのケースについて、議論とそれに続く投票、というプロセスが粛々と続けられていった。

5. 大学説明会 (Information Session)

選抜委員会に続き、10時頃から入試説明会に参加した。

説明会の担当者、ライアン・ハーグレイブズ氏 (Ryan Hargraves) は、小柄で気さくな若い黒人男性であった。アドミッション・オフィサーとして勤務する人は、将来的に研究者を目指す若者も多いということなので、ハーグレイブズ氏もそのような立場なのかもしれない。専門的な職務をつかさどる職員と教育研究に携わる教員との人事上の垣根が低いということが、わが国の大学と比較した米国の大学の特徴といえるだろう。

ハーグレイブズ氏は、対外広報部門 (Outreach Office) の入学相談員 (Admission Counselor) という肩書きである。通常はキャンパスには常駐せず、高等学校の訪問を行っているそうである。事実、ワシントンD.C.の高校を訪問して大学説明を行い、前日帰ってきたばかりということであった。

対外広報部門では、4月～6月くらいに掛けて、ヴァージニア州周辺を中心に約100校位を訪問するということである。少し以前までは、あまり遠くまでは出掛けていかない傾向があったが、最近は中西部くらいまでは訪問の範囲に入っているそうである。

アドミッション・オフィスのあるピーボディ・ホールの隣、学生会館として使われているニューカム・ホール (Newcomb Hall) という名の建物の中にある劇場で行われた説明会には、30名ほどの参加者があった。そのほとんどが父兄同伴であるということが、印象的であった。

最初にハーグレイブズ氏から30分ほど大学の説明があり、一通りの説明が終わった後、質問を受ける形式であった。説明の内容は、大学の概要、出願方法、奨学金、等々、アドミッションセンターの広報活動の一環として、日常的に志願者に対して話している内容と酷似していると感じた。しかしながら、ハーグレイブズ氏が一方的に話すだけであったのに対し、参加者に渡す資料やプレゼンテーションの工夫などは、日本の大学の方がむしろ洗練されているのではないかという印象も持った。

参加者からは、非常に活発な質問があった。その内容は、大学の活動から授業料や奨学金の問題など、質問の密度の違いこそあれ、日常的に経験してきた説明会の内容と酷似しており、その点、逆に新たな発見であった。

結局、決められた時間を過ぎてからも説明者のハーグレイブズ氏を捕まえて個人的に質問をする参加者もあり、後ろ髪を引かれながら中座して次のキャンパス・ツアーへと向かうこととなった。

6. キャンパス・ツアー (Campus Tour)

正しいかどうか分からないが、基本的には、志願する大学を選ぶ夏休みか、合格通知が届いてから入学する大学を決める4月がキャンパス訪問のシーズンであると認識している。その意味では、1月というのはシーズン・オフであろう。それにも関わらず、入試説明会に引き続き、20名程度がキャンパス・ツアーにも参加していた。

当初、正月明けの休暇期間でもあり、担当する学生が見つからなければキャンパス・ツアーは中止という話であったが、直前になって実施することになり、念願かなって参加することとなった。

この日の説明担当学生は、3年生に在学中の黒人女子学生で、サッカー部の選手だそうである。キャンパス・ツアーには、大学の紹介と同時に、そこで学ぶ学生の紹介という目的もあるそうだ。したがって、ガイドは、ヴァージニア大学学部生の代表といった性格を帯びることとなる。ガイドの仕事自体はボランティアで、無報酬だそうである。それにもかかわらず、キャンパス・ツアーのガイドは学生から人気があるということで、約20名の募集に対して200名ほどの応募があるそうだ。一種の名誉だからであろうか。

普段と同じ内容だと思われるが、この日も約1時間掛けて徒歩でキャンパス中心部のマコーミック地区にある主だった場所を見学して回るという企画であった。

最初は、アドミッション・オフィスのあるピーボディ・ホールを出発点にして、大学に関する説明があった。次に、近くの学生寮まで歩き、その紹介を

していた。先述のように、多くの学生が寮で暮らすことになるので、重要なポイントである。主に食事等、身近な日常生活の話であった。さらに、講義用の建物の内部に案内され、生物学の階段教室で授業に関わる話が続いた。その後、外に出て図書館の紹介へと続いた。最後に、大学の発祥の地（The Lawn）で講義と講義の間の学生の行き来の話、シャルロッテビルへのアクセスの話等、思いつくままの話題で話をして、アドミッション・オフィスのあるピーボディ・ホールの前までやってきて解散、という流れであった。

7. まとめ

米国のトップクラスの州立大学におけるアドミッション・オフィスの活動を実際に目の当たりにすることにより、単なるインタビュー調査では知ることのできない生の活動を実感することができた。

まず、ヴァージニア大学の印象は、きれいなキャンパス、瀟洒な建物である。大学内の学生会館に映画館があるといったような、学生用の娯楽設備の充実度は、わが国の大学では普通は考えられないであろう。キャンパス内の寮も含め、生活の全てがキャンパスとその周辺で完結できる構造になっている。

選抜委員会の議論については、非常にオープンに見学させていただいたことに対して、感謝と同時に驚きを感じた。プライバシーや個人情報の保護といったことに関して、ある意味で、過剰なまでに神経を使う米国社会という印象があったが、その先入観とは合致しなかった。同時に、価値観も含めてあらゆることが多様なのも米国社会の特徴なのかもしれないという感想も抱いた。

議論そのものは、一言で言えば「主観的」という印象である。「多様で多元的な尺度による評価」、というのはまさしくこのようなことを指しているのではないかとも思ったが、委員のちょっとした見解によって、結論がどのように転ぶかわからない、という危うさも感じた。評価の観点に関しては大体のコンセンサスがあるが、事実をどのように認識するか、様々な要素をどう重み付けて評価するか、といったところに個々の委員の間で大きな違いがあったことが面白い。また、全員が一致するまで議論を行おうとはせずに、適当なところで切り上げて投票で結論を出し、どんどん先へと進んでいくのも新鮮な印象である。そうでなければ、この方法は手間が掛かりすぎて実際的に運用が難しいであろう。

広報活動の内容に関しては、特段、大きな違いや驚きを感じることはなかった。むしろ、細かい工夫といった点では、わが国の大学がそれほど遅れを取っているわけでもないように感じた。しかし、逆にまた、意識的な広報活動の歴史が浅いわが国の大学では相当に力が入ってしまうような部分について、自然体で流れている感覚が心地よかった。

どちらかと言えば、訪問者のほとんどが父兄同伴という光景の方が、やや驚きであった。

まとまらない内容になってしまったが、本報告において、リアルタイムにその場で感じたことのいくばくかを表現することができたとすれば、幸いである。

付記

本研究は、平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究［A］）、研究課題番号 15203031、（研究代表者 白川友紀）における研究の一部として実施されたものである。

文献

国立大学アドミッションセンター連絡会議 (2004). 国立大学アドミッションセンター連絡会議ニュース、第2号

University of Virginia (2002). Prospectus, University of Virginia.

US News & World Report (2004). America's Best Colleges 2005 edition.

[i]名称は必ずしも「アドミッションセンター」とは限らない。

[ii]ヴァージニア大学への訪問日は平成17（2005）年1月14日、ノースイースタン・イリノイ大学への訪問日は平成17（2005）年1月18日であった。ノースイースタン・イリノイ大学に関する記録は拙稿「ノースイースタン・イリノイ大学におけるプレースメント・テストについて」を参照されたい。

[iii]資料にははっきりと明記されていないが、米国の大学における通常の統計の取り方として、6年以内に卒業する率を表していると思われる。米国の州立大学としては非常に高い数値である。後に確認したところ、4年間でストレートに卒業する率は85～6%程度であるとのことであった。インタビューに応じてくれたパーク・ムス氏（Mr. Parke Muth）によれば、以前と比べて卒業は易しくなっており、「かつては、入学式のときの挨拶で『ここにいる者のうち、4年後にここに残っているのは4人に1人しかいない』などといった訓示が有ったものだが、今は、できるだけ卒業まで持っていこうという感じである」とのことであった。

[iv]名称から考えて英国モデルと想像されるが、定かではない。

[v]2006年度の入学志願者から、SATの構成が変更されることになっている。新SATの受験は2005年の3月から受験可能である。主な変更点は、SAT Reasoning Test（現在の［SAT Ⅰ: Reasoning Test］）に作文が加わることであるが、それに伴い、UVAでは2006年度の入学者の募集から、SAT Subject Test（現在の［SAT Ⅱ: Subject Test］）の受験科目を任意の2科目選択に変更する、と予告している。http://www.collegeboard.Com/prof/counselors/apply/12.html を参照のこと。

[vi]おそらく、志願者によっては、アドミッション・オフィスの担当者や大学OBとの面談機会があるものと推測できる。

[vii]おそらく、寄付による優遇措置等の制度がないことを指していると思われる。

[viii]すなわち、一般選抜の場合、5月1日以前には入学の意思を取り消したとしても違約金を取ることができないという協定である。http://www.nacac.Com/downloads/policy_spgp.pdf を参照のこと。

LEG FAC SIB LD PR FN

SAT I Date	V	M	SAT II Date	WR	M	Other	Other	ACT Date	Comp	Other

GPA _____

RIC _____ of _____

_____ tenth/fifth

	EXCEPTIONAL	STRONG
CURRICULUM		
GRADES/RIC		
TEST SCORES		
ACAD INDUSTRY		
ACAD IMPROVEMENT		
LOVE OF LEARNING		
RECOMMENDATIONS		
HONORS/AWARDS		
EXTRACURRICULARS		
LEADERSHIP		
BB/CHARACTER		
SPECIAL TALENT		
WRITING: FORM		
CONTENT		
DIVERSITY		
ECON HARDSHIP		
OTHER ADVERSITY		
SINGLE PARENT		
FIRST GEN COLL		

SENIOR PROGRAM

Engl _____

Math _____

Soc sci _____

Fl _____

Lab _____

Other _____

Other _____

Other _____

AP/IB TESTS

Subject	Score

GRADES ON FILE

My ____ Final ____

POSSIBLE MAJOR

_____

TOEFL

Date	Score	TWE

TRANSFER

YR ENTERING _____

YR HS GRAD _____

LAST TERM GPA _____

CUM GPA _____

COMMENTS _____

EARLY 1	EARLY 2
Dec	
Code	
By	

REG1	REG2	REG3	REG4

REQUEST FOR MORE INFORMATION

Date: _____ By: _____	Date: _____ By: _____	Date: _____ By: _____
____ High School Transcript	____ High School Transcript	____ High School Transcript
____ Mid-year Grades	____ Mid-year Grades	____ Mid-year Grades
____ SAT Test Scores	____ SAT Test Scores	____ SAT Test Scores
CEEB ACH Test Scores	CEEB ACH Test Scores	CEEB ACH Test Scores
____ Eng. Comp.	____ Eng. Comp.	____ Eng. Comp.
____ Math I or II	____ Math I or II	____ Math I or II
____ Third Test	____ Third Test	____ Third Test
____ Part II (First year)	____ Part II (First year)	____ Part II (First year)
____ Transfer Supplement	____ Transfer Supplement	____ Transfer Supplement
____ College Transcript from:	____ College Transcript from:	____ College Transcript from:
_____	_____	_____
_____	_____	_____
____ TOEFL score	____ TOEFL score	____ TOEFL score
____ Financial guarantee form	____ Financial guarantee form	____ Financial guarantee form
____ English translations of educational documents	____ English translations of educational documents	____ English translations of educational documents
____ Other: _____	____ Other: _____	____ Other: _____
_____	_____	_____
_____	_____	_____

Freshman admissions and publicity in the University of Virginia

Naoki KURAMOTO

Associate Professor, Center for Advancement of Higher Education, Tohoku University; Education Division, Tohoku University Graduate School of Educational Informatics

Abstract: The main purpose of this visit to UVA was to observe real activities of the office of admissions. The anthor was accepted to join a committee meeting, an information session and a campus tour.

As a typical style of selective admissions, UVA has early and regular admission system for freshmen based on papers. Most of the decisions are made almost automatically. The observed meeting was set for exceptions; the candidates who could not be denied automatically although they did not meet the standards. Two of the cases were reported. The information session had about 30 participants, most of them seemed to be accompanied by parents or their guardians. We walked around the central part of campus with a guide student by the campus tour.

The author was impressed with subjective discussions within the meeting. Publicities of the Japanese universities did not seem to be far behind.

Key words: freshman admissions, North America, committee meeting, information session, campus tour